



永源寺

永源寺
執事長 山田 文諒

永源寺は、滋賀県の東部、神崎郡にあります。背後には飯高山が緑の山並みを見せ、崖下には音無川の清流が流れています。この音無川上流に建設された永源寺ダムは境内裏門付近から遠望できます。ダム建設に当たっては時の管長が、「下流の農家の方の農業用水として必要であるならば」と、永源寺寺領の一部を使用することを快諾したというエピソード



総門

ドが残っています。境内には楓科の木々が多く、秋の紅葉の美しさで有名です。

永源寺の開基は近江国（滋賀県）の領主であった佐々木氏頼です。氏頼は寂室元光の徳の高いことを聞き、その領地の中でも最も風光明媚な奥島と雷渓の幽邃を喜び、延文六年（1361）、ここに堂宇を建てて住しました。これが永源寺の濫觴であります。永源寺の名は、

開基である氏頼にちなんでいます。禪宗に深く帰依していた氏頼は、出家して法名を雪江崇永と言いました。この氏頼の法名から「永」の字を取り、佐々木の出自である源氏から「源」の字をとって寺号としたのです。

永源寺は初め飯高山と号していましたが、開創後間もなく瑞石山と改めています。この山号については二つのエピソードが残っています。



開山寂室元光禪師

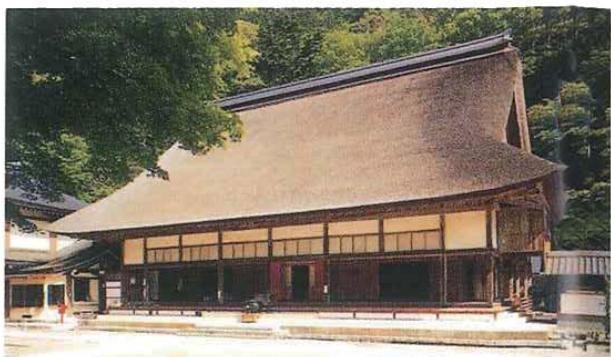


瑞 石(ずいせき)

寂室がこの永源寺に入山した後、その居室から外を眺めると、毎晩のように山腹の同じ場所に光が輝いていた。不思議に思った寂室がその山腹に登ってみると、そこに観音菩薩の像がありました。寂室はこの観音像が、中國からの帰途、嵐を鎮めてくれた白衣觀音に違いないと思い、その像を寺に持ち帰り、方丈に祀ったといいます。この観音像が立っていたためでたい石、つまり瑞石がある寺という意味で瑞石山と号しました。

もう一説は、方丈造立にあたり、山中にあった大石が必要となり、山の中でその大石を動かすには、大きさからいっても数百人の力が必要だと思われていました。しかしその石がまるで自分から寺に行きたがっているかのように動いたため、実際には十数人の力でその石を定位置に納めることができたといいます。石がめでたく納まったため、方丈建立にあわせて瑞石山と改めたといいます。

寂室の示寂 後は、その高弟である
弥天永釈、松嶺道秀、靈仲禪
英、越渓秀格の四人が出て、それ
ぞれ永安寺、興源寺、曹源寺、退
藏寺を開創し、永源四派を形成し
ました。四派の成立は明徳元年
(1390)頃とされ、この四派がそ
後の永源寺をもり立てていきました



本 堂

た。中でも永釈の門下が栄え、その十五代の法孫に永源寺中興の祖と仰がれる一絲文守(1608~1646)が出ています。

十四世紀末頃は足利義満も永源寺を厚く崇敬し、寺領を寄進しています。また、明徳二年(1391)には開基佐々木氏頼の嫡子満高が、世継ができなかったため祈願に訪れていました。満高が寂室ゆかりの観音菩薩に祈願したところ



山門樓上の釈迦三尊

ろ、世継ぎが得られたといいます。このことが世間に伝わり、この観音像は世継ぎ観音と呼ばれるようになり、世継ぎを求める参詣者が多くなったといいます。

明応四年(1495)、後土御門天皇は黄衣の宣旨を下賜して、永源寺の寺格を鎌倉円覚寺の上に置いています。享禄元年(1528)には後奈良天皇も紫衣の宣旨を下し、寺格を天龍寺に準じるものとしています。このように朝廷からの庇護を受けてはいましたが、十五世紀末頃の永源寺は衰微していたと伝わり、文明十八年(1486)になって諸堂が修築されたことが記録に残っています。さらにその六年後の明応元年(1492)には兵火に遭い、方丈など堂宇がことごとく焼け、また永禄六年(1563)にも放火により焼失しています。

江戸時代に入り、寛永年間(1624~1644)には諸堂の修復が始まっています。この復興は一絲文守によるところが大きく、三十六歳の若さで永源寺に入寺した一絲は、後水尾天皇から皇族からの篤い帰依を受けています。

まず後水尾天皇から永源寺に官林が下賜さ



舍利宝塔



馬郎婦觀音像



鐘 樓



狩野山樂の筆であろうと伝えられている(桃山時代)

れ、これによって方丈が再建されています。天皇からはさらに釈迦、迦葉、阿難の三尊仏が正保元年(1644)に寄進されました。また奈良の円照寺宮大通文智尼からも寄進があり、大鐘の再鋲、開山堂や僧堂の再建などが行われました。寛永十九年(1642)には仏殿が再建され、東福門院の作になると伝わる馬郎婦観音と仏前の戸帳が寄付されています。翌年には後陽成上皇と後水尾上皇から宝硯が贈られ、また宸筆の和歌が下賜されています。これらの寄進はすべて一絲の徳の高さによるものといわれ、永源寺は一絲を中興の祖と位置づけ

ています。

その後、享保九年(1724)に火災に遭い、方丈、鐘楼、仏殿など、堂宇のほとんどが焼失しています。その翌年には諸堂再建のため、地元近江彦根藩大名の井伊氏に寄進を願い出て、同十二年(1727)に僧堂の再建から取りかかっています。しかし、それら堂宇の完成後間もなく、明和元年(1764)には再び大半が焼失しています。その翌年から再建事業が始まり、江戸時代末期までに、ほぼすべての堂宇が再建されています。

明治時代に入ると、政府の宗教政策により、明治九年、臨済宗各派が独立しますが、永源寺は、この時点では東福寺派に属しており、同十三年になり一派として独立しました。

一絲和尚の墨跡
「生死事大無常迅速」

滋賀文化財教室シリーズ No.177号

発行年月日 1998年8月1日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525